

# 校長室から

令和2年10月26日

## 涙を流しながら進んだ暗いトンネルだけど 走り続けていたから できると 思えた

過日、東京オリンピック卓球女子の日本代表に選出された石川佳純選手の特集がテレビで放送されていました。オリンピックは来年に延期された状態になっていますが、石川選手は過酷な選考試合を勝ち抜き、内定選手となり、来年のオリンピックのために精進しています。幼少の頃から卓球に打ち込み、早い段階で日本代表選手となり、これで3度目のオリンピック代表となります。今でもまだ若い世代ではありますが、卓球界では世代交代が激しく、「リーダー格」そして「ベテラン」の選手として責任ある立場にありました。

その石川選手を3年間に渡って取材したドキュメンタリー番組でした。3年もの間、マスコミから取材を受けながら、選手生活を続けるというのは、強靱なメンタルが必要だと思います。

当時のランキングは世界第3位で、試合では世界1位にもひるむことなく挑み、逆転で勝利した事もあったそうです。「強いメンタルで、そしてよくない流れでも試合を立ち直せる」と評判でした。しかしその後、2019年7月には、オリンピックの代表選考試合のポイントで、若手にリードされ、追い詰められた状況だったようです。その状況も克明に記録され、放送されていました。

**「フィギュアスケートを無理にやらされているような夢や、追いかけている夢など変な夢ばかり見ます。」**かなりプレッシャーがあったのでしょうか。翌月の8月からは、ヨーロッパでの選考試合が開催されました。ブルガリアで行われた試合では、かつて好成績を収めたことがあるようで**「ブルガリアには福がある」**と話していました。しかし、結果は準々決勝で中国の若手に敗退。第1セットあと1点取れば、というところで突如乱れ、そのままストレート負けしてしまいます。**「痛すぎ、マジで、最悪。」**言葉が続きません。**「反省して頑張ります。」**と、取材されるのが苦しいようでした。

気持ちを切り替え臨んだ、チェコでの試合。今度は準決勝まで進みます。対戦相手は、オリンピック代表を争っていた若手の平野選手との直接対決でした。しかし、石川選手は平野選手に圧倒されてしまいます。少しずつ自信を失っていつているようでした。**「マジ、後悔」「勇気出さないと負け。」****「いつもどおりやってはだめだ。今までで一番苦しい。徹底的に鍛えないと。嫌な事も進んでやる。」**と、必死に気持ちを持ち直そうとします。この時点ではまだ笑顔が少しありました。

そして、10月、今度はドイツオープン。重要な位置付けの試合で、勝ち進むと、高いポイントが得られる試合でした。**「何が何でも勝つ。」**試合前日の夜も、入念に会場練習を行います。本番での対戦相手は世界ランキング72位の無名選手。第1セットは獲得したものの、その後突然崩れ、敗退してしまいます。**「泥沼で底なし沼」**だったそうです。**「どうやって負けたのかも分からない。」**その後はもう言葉にならず、取材もストップしてしまいます。敗戦でパニックになったそうです。

**「どうしたらよいか分からない。自分のスタイルをもう一度考え直さなければまた同じような結果になる。勝ちたいという気持ちが強すぎた。」**2日後にやっと取材に応じます。気持ちをもち直して、歩きながら取材を受けますが**「どうしちゃったんでしょう。しょうがないですね。勝負弱くなってますね。なんで勝てないんだろう。」**と、涙があふれ、しばらくの間、カメラに背を向けます。**「できる事は増えているはずなのに、気持ちと身体がついていっていない。でも自分を助けら**

れるのは自分・・・何かを守ろうとして金メダルを取れる人はいない。」取材に応じながら、自分自身を納得させようとしませんが、なかなか上手くいかないようでした。

そして、次の中国での試合。準々決勝で苦手なシンガポール選手と対戦。「ある程度捨て身の戦い。リスクを負ってどんどん攻めていく。ふつうに勝つのは難しい。」強い決意を持って試合をしますが、フルセットで敗れてしまいます。取材しようとする「みんなうるさい。ほっといてほしい。ああ疲れた・・・ダメだ勝てない。でもドイツよりはましになったかな。昔はチャンスをつかんでいた。逆に自分にプレッシャーをかけて楽しんでた。今はかかりすぎている。簡単にはいかないなあ。でも少し立ち直るきっかけになる試合だった。次の試合はちょっとだけ楽しみです。」  
「私のこと、取材している価値はありますか？」と取材班の方々に問いかけます。

石川選手は、7歳から卓球を始め、「どんな練習も苦にならない。負けるのが嫌で、いつも攻め続けていた。」と父親もインタビューに応じていました。小6で年代別の全国1位になり、「夢はオリンピック。夢をかなえるためにすべてを卓球に捧げようと思った。」中学校は卓球名門校へ。「人生バラ色だと思った。道にバラが咲いているイメージ」だったそうです。

しかし、現在は「上にいけばいくほどハードルが高くなる。やればやるほど難しい。」と苦悩します。周囲の専門家は「伊藤や平野との違いは、二人は中国の選手に勝つという高い意識をもって、石川の世代は中国以外の選手には勝つという卓球で、決定的にその差は大きい。」と話していました。「もう石川の時代ではない。石川はもう終わった」と心ない言葉も聞こえ始めます。苦しみの連続で「トンネルの中が暗すぎて、何かを変えるのが怖くなっていた。でも自分自身にあきらめたり、逃げたりしたくない。転げ落ちるか、踏みとどまるか崖っぷち。」の日々。

苦しんだ末に、2019年12月、いよいよ選考レースの決着の日を迎えます。カナダでの試合。この時点では、2人しか代表になれない中の3番手のポイントしか獲得できていませんでした。上位は伊藤美誠選手、そして2番手に平野美宇選手。3番手として迎えた大切な試合でした。中国の選手に勝ち続け、決勝まで進みます。相手はやはり若手の平野選手。平野選手にとっても大切な試合であり、この試合に勝利するとオリンピック代表が内定するという試合で、まさしく二人にとって大一番でした。石川選手は「これが最後のチャンス、このチャンスがあること自体を有り難いと思う。攻めきることで勝ちたい。自分を助けられるのは自分しかいない。気持ちで引いてはダメ。勇気出したほうが勝ち。」必死に自分を奮い立たせ、大接戦を勝利します。

「ずっとトンネルの中において、光が見えなかった。涙を流しながら進んだ真っ暗なトンネルだけど、走り続けていたから、ああできると思った。今日一日、今日一日の繰り返しだった。でも自分に勝った。」「すごく辛かった。卓球をやめたかった。とてもつらい1年だった。ただ普通の努力をすれば結果がついてくるというわけではない、という事もわかった。うれしさ、楽しさ、そして辛さも苦しさも10倍だと、何も分かっていなかった7歳の自分に教えてあげたい。」

最後に取材班の方に「プロフェッショナルとは何だと思えますか」と問われます。「う～ん 次まで考えさせてください。」と答えを保留し、取材が終わります。これからも、様々な事を考え続けながら、答えを探し続けるのでしょう。苦しんでたどりついた3度目のオリンピックでした。

私達も一流アスリートのような究極の努力に及ばないかもしれませんが、皆さん、特に3年生は何か感じるものはありませんか。「努力」や「苦しみ」「喜び」などの大小は人と比較できるものではありません。受験に向けて苦しんでいる過程もきっと石川選手と同じように大きな気持ちの揺れがあると思います。「どうしてこんなに苦しむのかな」「早く解放されたい」と思っている生徒も多いと思います。未来や結果が見えていれば、楽でいられるのかもしれませんが、しかし、先が見えないからこそ、人間はよい準備をし、努力することを続けるのかもしれませんがね。石川選手が答えを保留したように、私達も答えを探しながら人生を歩んでいるのだと思います。